

国際的資質を育成する社会科学習 (1)

～国際的資質を育成するカリキュラムの開発～

柳生 大輔 村上 忠君 石原 直久 池野 範男
棚橋 健治 木村 博一

1 研究主題設定の理由

国際化の進展が著しい現在。それは、今後もさらに加速度的に進むであろうと予想される。国際化が進んだ社会の様子とはどのようなものだろうか。企業はさらに多国へと進出していくことが考えられる。それと同様に多国の企業も我が国へ入ってくることは間違いない。企業の進出＝外国人の増加にはつながらないが、多国との関係がこれまで以上に増えるということは、外国との交流が広がり深まることになる。国は人と人が集まって構成されているものであるから、多国との交流が広がるということは、これまで以上に外国人と接する機会も増えるであろうし、その国の人たちの文化にも触れる必要も出てこよう。また国家間の交流だけでなく、国策レベルや企業レベルではない、いわゆる生活のために労働者として訪れる多国の人々も急増しているという事実もある。

このような現実をとらえる時、現代の社会は国際化の様相を強く示していることがわかる。では、国際化が進む社会を構成する社会人としての公的資質とはどのようなものだろうか。公的資質の中でも特に「国際的資質」の育成が急務であると考え、本研究主題を設定した。

2 国際的資質とは

国際的資質は、公的資質と密接な関係にあるので、まずは公的資質から考えてみたい。公的資質について学習指導要領では「公的資質とは、国際社会に生きる民主的、平和的な国家・社会の形成者、すなわち市民・国民として行動する上で必要とされる資質を意味している」とある。(小学校学習指導要領解説 社会編 P.13より引用) 公的資質は文字通り「公民」であり、市民・国民といういわゆる「公」の立場として必要な資質である。

しかし、国際化が進む現代社会では、先に述べたように、人々は国家に帰属しているという感覚よりも、地球市民的意識を持ち始めた。また「世界遺産」にみられるように価値観も共通性を持ち始めている。このように国際化が進むと「市民・国民」レベルの「公民」という立場だけでは、国際化する社会には対応できない。市民・国民といった「公」よりも広い資質が必要となる。では「公」よりも広いものと言えば、「私」である。「公」は市民であるならば、そこに存在する「市」の数だけ、国民であるなら存在する国の数だけある。それに対して、「私」は人の数だけ存在する。

そのように考えると国際化が進む現代社会において必要な資質とは「人と人との関係を平和的に形成するために必要とする人としての資質」と考えることはできないだろうか。市民・国民・民族・人種といったレベルではなく、全くの「私」である。となると国際的資質とは、人間として必要な資質すなわち人間性そのものということになりそうである。

しかし、国家が消滅するとは考えられない。いくら地球市民的意識を人々が持とうが、現実として「私」の生活は国によって保障されている。

以上のように考えると「国際的資質」とは「国家や民族、人種、宗教、文化などの違いを認め、人が人として存在するために、他者との関係を平和的に形成するために必要な人としての資質」ということができるのではないかと考える。

また国際人とは、「自国と他国(または多国)とを意識している人」端的に「世界を意識している人」と考える。

3 めざす子ども像と育成すべき力

3.1 めざす子ども像

「国家や民族、人種などの違いを認め、人が人とし

て存在するために、他者との関係を平和的に形成するために必要な人としての資質」という国際的資質を育てるためには、まず思いこみや人のうわさ、情報操作によるプロパガンダなどに惑わされず、偏見にとらわれない公正な思考・判断力が必要である。そのため次のような子ども像を描いた。

- 事実をしっかりと捉える子ども
- 多面的・多角的に社会的事象を捉える子ども
- 自主的・論理的に判断できる子ども

3.2 育成すべき力

3.2.1 観察力

小学校3・4年生では主として「事実をしっかりと捉える子ども」の育成を行う。偏見にとらわれない思考・判断を行うにあたっては、科学的論理的に社会的事象が捉えられなくてはならない。その基本となるものが「事実を事実としてしっかりと捉えること」である。

そこで、小学校3・4年生では育成すべき力の中心を「観察力」に置く。「観察力」とは、目の前にある社会的事象がどのような状態であるのか、またこれからどうなるのかありのままの姿を注意してみることである。

この学年段階では、多国との関係を捉えることは困難であるが、同じ社会的事象を比較することはできる。しかしこの場合の比較は、相違点や共通点を見出し判断することではない。あくまでも相違点や共通点を事実として捉えることが大切である。それが国際的な視野を育てることになり、多国の違いを認めることにつながるのである。

3.2.2 批判力・推理力

小学校5・6年生・中学校1・2年生では主として「多面的・多角的に社会的事象を捉える子ども」の育成を行う。

社会的事象のもつ意味やそれらの関係を捉えていくときに、留意しなくてはならないのは、社会的事象は様々な面を持っているということである。その社会的事象を1方向から見て思考・判断するのは偏見である。偏見にとらわれない公正な思考・判断を行うにあたっては、社会的事象をいろいろな視点でもって科学的論理的に捉えることが大切である。そこで、小学校5・6年・中学校1・2年生では育成すべき力の中心を「批判力」・「推理力」に置く。

「批判力」とは、目の前にある社会的事象を理論的・科学的に検討し、評価・判定をする力である。理論的・科学的に検討するためには複数の資料を用いることが必要であり、それが多面的・多角的に考察することにつながるのである。その結果、宣伝や情報操作などに左右されない理性的な判断行動を身につける基礎とな

るのである。

「推理力」とは、既知の事実を基にして、未知の事柄を推し量る力である。そして事実を事実として捉え、それらの関係を比較検討していく中で、社会的事象の真実の姿や今後の動静などを読む力の基礎を養うものである。

小学校6年生から中学校2年生までの3年間で、我が国の現状理解と過去理解を多国との関係を有機的に捉えていく。このような学習を通して、国際社会の様子を立体的につかむことができる。そして我が国を大切にするという態度が、多国を尊重することに活きるのである。

3.2.3 社会的判断力

中学校3年生は、本学園の最高学年であり最終目標でもある。よってこれまでの目標が総合されたものである。これまで行ってきた現状理解や過去理解は我が国が、今現在に存在するに至る過程であり、意義を考えるものである。さらに本学年ではこれまでの学習をもとに、今現在の有り様を冷静に捉え、政治的な宣伝や情報操作に惑わされることなく、自主的に論理的に判断し行動することを身につける。このような社会的判断力をもつことが民主主義社会の発展につながるのである。

国際化していく社会を「友好」という視点だけで見ていくのではなく、現実の国際社会を冷静に見ることにより、多国の差異を認め「理解」していく。また現代の国際社会の問題や今後の国際化に向けての動向に対して、自分なりの問題意識や解決に向けての方策をもつ。そのことが世界的な視野をもつ人であり、国際的資質の基礎を育てるのである。

4 研究計画

第1年次 国際的資質を育てる教材の開発

第2年次 国際的資質を育成するカリキュラムの開発

第3年次 国際的資質を育てる研究の成果と課題及び修正

5 カリキュラムの編成について

これまでの「社会的事象への関心・意欲・態度」「社会的な思考・判断」「観察・資料活用の技能・表現」「社会的事象についての知識・理解」の4観点を不易なものとし、21世紀の社会はますます「国際化」していくことが考えられるため、新たに「国際的な資質」の観点を加えた。

本年度の研究は次の3点を重点項目としている。

○「国際的資質を育てる」という視点やねらいをもつ

た教材を用いて、授業実践を行なう。

○これまでの4観点に加えて、「国際的資質」の観点を加え評価を行なう。

○「国際的資質」の評価規準の研究

そして、小学校と中学校の学習内容の連携を図り、小中一貫校としての特徴が見えるように工夫した。具体的には、

・各学年における社会的認識を「空間的認識」「時間的認識」「機能的認識」の3認識で統一している。結果どの学年にも、3認識が育成できるように、これまで第4学年で学習していた「昔の暮らし」を、第3学年に移行した。

さらに「国際的資質の育成」をはかるために、

・小学校第3学年～第5学年では、学習内容の中に、「多国との関係に気づく」「多国との関係が観られる」ように内容を構成し、小学校の最終学年である第6学年では、後期の終期に「国際友好に関する単元」を設定している。

・中学校では「空間的認識（地理的分野）」と「時間的認識（歴史的分野）」を第1・2学年で習得する。

・第2学年の後期の終期に「国際理解に関する単元」を設定。

・本学園最終の中学校第3学年の後期の終期において、これまで習得した知識を使い、「国際問題に関する単元」を設定した。

6 「国際的資質を育成する単元について」

○「国際友好に関する単元」：国策レベルではない、国益には関係しない、人として取るべき行動を行なった歴史的事象から学ぶ。いわゆる国際的な感覚を育成する単元。（例：エルトゥールル号の遭難）

○「国際理解に関する単元」：国際化社会は、友好だけではなく多国の利益が複雑に絡み合ったところもある。そのような利権がらみをも学習し理解していく単元。（例：アメリカの小麦戦略）

○「国際問題に関する単元」：現代社会において、地球的規模でもって解決を図らなければならない今日の課題について、どのように考え行動することが大切かを学習する単元。（例：地球環境問題）

以上のような研究構想に基づき、次のような教材を開発していった。

7 小学校5年生「国際的資質を育成する」単元 実践報告

7.1 単元名

○「さくら前線を追え！—さくらの開花予想の当期

日線図から日本国土の様子を知ろう—」

7.2 単元について

3月に入ると、気象庁から「さくらの開花予想」が出され、テレビや新聞紙上でさくらの開花が盛んに取り上げられるようになる。子どもたちは、家族や地域でお花見を楽しんでおり、桜は子どもたちの生活にとっても身近な存在である。一般的に桜といえはソメイヨシノのことを指している。

ソメイヨシノはほぼ日本国中に植えられているが、すべてクローンである。つまり標高や気象条件が同じなら、ほぼ同じ時期に開花する。またソメイヨシノは、夏頃に翌春咲く花の元となる花芽を形成し休眠に入る。花芽は冬の低温に一定期間さらされると休眠から覚めるといふ「休眠打破」という性質がある。花芽は休眠打破のあと、気温の上昇とともに生長し開花する。これらの特徴により、「さくらの開花予想の当期日線図」（以下「さくら前線」という）から、日本各地の標高や気候の相違が分かる。

本単元では、ソメイヨシノの開花が、冬や春先の気温、及び地形の影響を受けていることを様々な資料を活用することで知り、日本国土や他国の大まかな気候や地形の様子について理解することが主なねらいである。また、都市部においてさくらの開花が早まっている現象の背景を探ることにより、今問題になっている地球温暖化やヒートアイランド現象について考えることができる単元でもある。

7.3 国際的資質を育成するための手だて

小学校第3・4学年では、事実を事実としてしっかりと捉えることができるように「観察力」を中心的育成している。小学校第5学年ではこの観察力をもとに、多面的・多角的に社会的事象を捉えることができるように「批判力」および「推定力」を中心的に育成している。

本単元では自分たちの予想を確かめるためには、どのような資料が必要なのか考えさせたり、複数の資料を関連づけてみたりすることで、批判力、推定力の育成をはかった。具体的には、

- 日本各地の年平均気温、年平均降水量
- 日本全土、大韓民国の地形図
- 気象庁発表の「さくらの開花予想の当期日線図」、大韓民国気象庁発表の「桜開花予想」
- 大阪市の航空写真
- 大阪市のサーモグラフィー
- 大阪市内のソメイヨシノの開花日分布状況「生態系への影響（桜の開花日）」

など。

7.4 子どもたちの実態

子どもたちは、日本で最初にさくらが開花する場所を「沖縄や南西諸島、九州」(18名)と答え、最後にさくらが開花する場所は「北海道、東北」(31名)と答えている。その理由については「さくらは暖かいところから順番に咲く」ととらえており、「沖縄・九州(南)は暖かく、北海道・東北(北)は寒い」と、日本の大まかな気候については理解している。しかし、さくらが日本列島を移動する時期は「3月～5月」(22名)と答えており、日本列島の長さや気候の多様性には気づいていない。テレビのニュースや新聞記事から得た情報により、「東京のさくらは早く咲く」(5名)と答えるなど、都心部でのさくらの開花が早いことを知っている子どもがいたり、自分が切り抜いてきた新聞記事だけでさくらの開花を予想したりするなど、複数の資料を活用し事象をとらえたり、その背景について考えたりすることができていない。

7.5 単元の見目録

- さくらの開花や「さくら前線」の動きに興味、関心をもち、さくらの開花条件を探り、我が国の位置や地形、気候の様子を、資料を活用して調べようとする。
- さくらの開花日をもとに、国土の位置や地形、気候の概要について具体的に理解し、地域ごとの特色がわかるようにする。
- 自分がたてた予想を検証するために必要な資料を考えだし、予想を各種資料から確かめることができる。また我が国の国土の大まかな様子についてまとめることができるようにする。
- 「さくら前線」の移動を考えることを通して、国土の位置や地形と気候は密接に関連していることを具体的に考えることができるようにする。
- 50年前と比べて、さくらの開花が早まってきている理由を考えることを通して、わたしたちの生活が、日本及び世界の自然環境に大きな影響をあたえていることを理解できるようにする。
- 他国のさくら前線をもとに、その国の土地の様子を考えることができる。

7.6 授業の実際

(1) 単元計画(全9時間)

- 第1次 新聞記事からさくらについて考えよう
..... 3時間
- 第2次 「さくら前線」から日本の国土の様子について知ろう..... 3時間
- 第3次 開花日から自然環境の変化について考えよう
..... 3時間

(2) 授業の様子

①第1次 新聞記事からさくらについて考えよう

単元の導入において、まずは子どもたちに新聞記事から「さくら」について関連のあるものを切り抜いてこさせた。子どもたちは、自分たちの地域(広島県、三原市など)における「さくら」の記事や、他の都道府県における「さくら」の記事を切り抜いてきた。しかし、圧倒的に広島県内の記事が多かった。自分たちの身のまわりの地域の記事が親しみがあったり、「どこあたりのことなのか」分かりやすかったりしたからだと考えられる。また、中には「桜開花情報」を切り抜いてきている子どももいた。

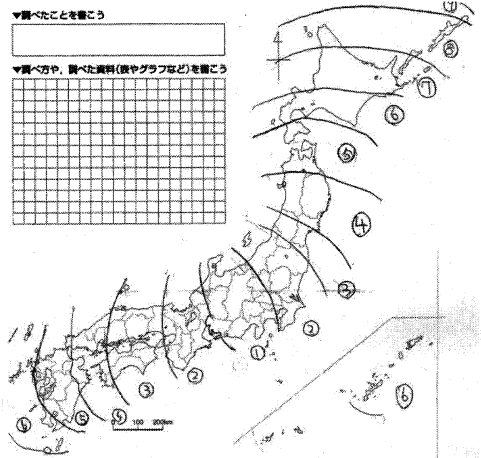
子どもたちは、「福山市ではもう満開なのに、庄原市ではやっとさくらが咲き始めたんだって。」「広島より大阪の方がさくらの開花は早いよ。」など、さくらの開花について興味をもって学習していった。さくらについて、図鑑やインターネットなどをもとに情報を集めまとめてくる子どもたちもいた。各自が切り抜いてきた新聞記事を交流し学習していくことで、子どもたちは次のような疑問をもち課題を設定していった。

- 同じ広島県内なのに、どうしてさくらの開花日が違うのだろう。
- さくらが早く咲くためにはどのような条件があるのだろう。

②第2次 「さくら前線」から日本の国土の様子について知ろう

ア 日本の国土の様子

さくら前線の意味について学習した後、子どもたちは日本地図(白地図)に、自分の考えをもとに「さくら前線予想図」をかいていった。「さくらはあたたかいところから開花していく」と考えている子どもたちは沖縄・九州地方から、ニュースなどにより「さくらは東京から開花していく」と考えている子どもたちは東京から同心円状に「さくら前線予想図」をかいていった。



8.5 単元の目標

- 国際社会における日本の役割について興味・関心を持ち、意欲的に追究することができるようにする。
- 国際社会におけるわが国の役割について、国際平和や国際協力、政治的観点などの事例から、多面的・多角的に考察することができるようにする。
- 新聞記事やビデオを利用して、国際社会の現状について調べることができるようにする。
- 日本の国際貢献を理解できるようにする。
- 日本の安全保障理事会常任理事国入りの是非について、調べて考えたことをまとめて、交流することで、思考の再構成をし、発表する力をつけるようにする。

8.6 授業の実際

(1) 単元計画 (全8時間)

第1次 日本の国際貢献を知る・・・5時間

第2次 世界平和に向けて、現実をつかむ
・・・・・・・・・・・・・・・・・・2時間

第3次 発信への準備・・・・・・・・・・1時間

(2) 授業の内容

①第1次 日本の国際貢献を知る

具体的にどのように授業を進めていったのか、順をおって説明していきたい。

〈1〉導入の意味もこめて過去に日本においておこった戦争(乱、役、変なども含めて)の年表を作成する作業を行った。1945年以降は、日本が直接的に戦争に参戦していないので、世界の国々の中でおこった戦争をまとめていった。これら一つにまとめた表から、1945年から2004年までの59年間の日本の状況、なぜそのような状況が続いているのかという理由をまとめていった。日本国憲法第9条や日米安全保障条約など日米間のことを挙げていた生徒が多かった。

〈2〉日本国憲法前文を読んで、この文にこめられている平和への思いを感じることに主眼を置いた。続いて、日本国憲法第9条を読んで、その内容を理解し、憲法第9条と自衛隊の関わりについて、自分の考えをまとめていった。

〈3〉前時の内容をふまえて、班で自衛隊の存在について憲法第9条をふまえて憲法との整合性について考えていった。自分の考えを、班の中でお互い出し合う中で、自分の考えをより深いものにしていった。また、国家と領土問題についても考えていった。主権国家の三要素について理解することと、日本の抱える領土問題を、最近中国との間でおこった東シナ海でのガス田問題に関する新聞記事を利用して考えていった。

〈5〉日本の国際貢献について考えた。考えていく資料として、ODAについては、統計資料として、ODC諸国のODA支出額上位15カ国、ODC諸国のODAの

贈与比率、日本のODAの財源を参考にした。また、日本の国家予算におけるODAの抑制についてや、ナイジェリアの日本に対するODAの増額、債務削減要請などの記事も利用した。日本のODAの具体的事例として、フィリピンでのバタンガス港開発事業についての資料を利用した。人的国際貢献を考える際、陸上自衛隊のホームページにのっている「陸上自衛隊の役割」「国際貢献活動」、防衛庁から出された「平成16年新潟県中越地震に係る災害派遣について」の資料を活用した。その他、国際連合広報センターのホームページから「加盟国一覧と予算分担率」も利用した。以上の具体的資料を一つ一つ確認をし、事実に基づいた思考を行うよう心がけた。

②第2次 世界平和に向けて、現実をつかむ

〈1〉国際連合憲章の前文をじっくり読み、そこにこめられた思いを感じる。また、憲法第9条の精神と国際連合憲章の精神を比較していった。

〈2〉日本は国連安全保障理事会常任理事国へ入るべきか否かを考えた。次に、安全保障理事会は、日本の常任理事国入りに賛成なのか考えた。

③第3次 発信への準備

今まで学習してきたことをふまえて、平和への思いを作文にまとめ、交流した。

8.7 結果とまとめ

本単元で、特に生徒の思考力・判断力を育成していく学習場面として、次の三つを挙げることができる。「憲法前文・憲法第9条と自衛隊」との関係、「憲法前文・第9条と国連憲章」との関係、「日本の常任理事国入りに対する思い、考えとそれに反対する国の思い、考え」との関係、を考える場面である。それらを考える中で、生徒の多くは自分の既存の考えでは結論にむすびつかないことに会い、自主的・理論的に判断する力を身につけていると言える。また、自分の考えとは違う考え・意見に出会う中で、思考の再構成をすることができた。

次の文章は、憲法と自衛隊の関係を学習した後のある生徒の考えである。

どちらかわかりません。なぜかという、自衛隊と言っても戦うのは同じことだし、それでは憲法第9条に反するし、自衛隊を送ったせいで人が死んでしまうから、自衛隊はない方がいいです。でも、自衛隊が無いと、アメリカに「イラクに行け」と言われても行く組織がないから、アメリカに逆らうことになる。また、どこかに攻めてこられた時に、何もなければたくさんの方が死んでしまう。世界の全部の国が戦力不保持だったらうまくいくと思います。

この生徒は、当初自衛隊の存在を憲法第9条との関係から否定的にとらえていた。アメリカと日本の関係を考える中で、思考の揺れを読み取ることができる。

また「日本の常任理事国入りに対する思い、考えとそれに反対する国の思い、考え」との関係を考えて時の生徒のものである。

○賛成

私は常任理事国に入ってもいいと思います。新聞にもあるように日本は、自衛隊をイラクに派遣したり、世界各国でのPKO活動、分担金の分担率、ODAの額などの面から見ても、日本は結構、国際貢献の役割を果たしていると思うからです。でも、問題が1つ。常任理事国となれば、国際紛争解決のためなら、陸・海・空軍を利用できるけど、日本国憲法ではそれらを認めていないことです。解決方法をかえるとか、憲法を改正するかすればいいと思いました。

これからも、日本の支援や技術やPKOは必要になってくると思います。

○反対

日本は、国連の分担金も多く払っているし、PKOや自衛隊派遣でも世界の平和に役立っている(たぶん)と言えるだろう。だから、常任理事国入りする資格はあると思うし、他の国の賛成もきっと得られるだろう。しかし、常任理事国という世界を動かす地位について、アメリカ(ブッシュ大統領)やイギリスと手を組んでしまうことは、必ずしも良いとは言えないと思う。私は、今のアメリカのイラクへの軍事支配が良い状態を保っているとは当然言えないと思う。ブッシュ大統領が方針を変えないつもりなら日本はそれに従うべきではないと思う。

このように、学習した知識を結びつけて思考することを継続していくことで、国際社会の問題や今後の国際化に向けての動向に対して、自分なりの問題意識や解決に向けての方策をもつことができるようになった。また、社会的な論争問題を提示したことにより、焦点化した議論が展開され、キーワードや判断のポイントを見出しやすくなり、個人の価値観の違いなどにもふれながら社会的な見方や考え方が広がった。

しかし課題もいくつか見つかった。例えば上の賛成意見を述べた生徒は、班の意見交流の際、対立意見として「国連憲章と日本国憲法の矛盾」や「具体的メリットがないこと」、「国連における日本の負担の増加」などに出会っている。このことををもっと具体的に深めて、クラス全体で考える場面を設け、生徒が互いに考えを説明しあったり、妥協案を作り上げようとする場面を持つ必要があった。そのことが社会的判断力をつけることになると考えられる。授業者が、授業内で適切に判断して授業を構成する必要性を痛感した。

国際的資質の視点から他者との関係を平和的に形成するためには、自分の考えを持った上で、自分とは異なった考えを持つ多くの人たちと、議論を重ね、思考を再構成しながら、最終的結論に到達していく努力が必要である。今後も実践研究を積み重ねることで、国際的資質の基礎を育てていきたい。

8.8 成果と課題

本校社会科部会では、「国際的資質」を育成するカリキュラムを開発してきた。そして「国際的資質を育成する」という視点やねらいをもった教材を開発し、授業実践を行うことで各学年でつきたい力を子どもたちにつけていくことを目標としている。子どもたちが授業中の中で自分の意見や考えを記したワークシートなどの内容を読み取ることで、つきたい力が付いているのか、また授業の目標が達成できたのか、評価していった。子ども達の記述を読む中で、思考の過程が分かり、どのような学習内容によって思考の揺れが生じ、思考の再構成をしたのかがよく分かった。同時に、思考の深まりが授業者が期待したほどではなかった事例の把握にも大変参考になった。引き続き、教材開発に取り組み、修正をしていきながら国際的資質を育成するカリキュラムの研究を推進していきたいと考えている。

また、各単元の評価を行う上で、客観的な評価になっているかと考えた時、様々な評価方法の中から、複数の評価を取り入れることが総合的な評価につながるものと考えた。今後の課題として、小中一貫したカリキュラムの中で行われる単元学習の成果を、より客観的に把握するために信頼度の高い、複数の視点から評価できる方法を、引き続き研究していきたい。

国際的資質を育成する社会科単元配列表

	初期の第1段階	第1段階	第2段階	第3段階	第4・第5段階	第6段階
	小3学年	小4学年	小5学年	小6学年	中1学年 中2学年	中3学年
空間的認識	1 私たちの市のように 2 私たちの市で作り出される物 4 どんなどころがあるかな？	2 わたしたちの広島県 5 国と世界の国々	1 私たちの生活と食料生産 2 私たちの生活と工業生産	3 世界の中の日本 (1) 我が国とつながりの深い国々	国際的資質を育成する単元（主として国際理解に関するもの）	国際的資質を育成する単元（主として国際問題に関するもの）
社会的認識	3 昔のくらし	3 郷土に伝わる面白い	5 わたしたちの生活の移り変わり	1 日本の歴史	歴史的分野	
認識	1 私たちの市のように ○くらしと商店	1 住みよいくらしをたええる ○ごみの将来と知恵 4 くらしを守る ○火事がおきたら	3 わたしたちの生活と情報	2 わたしたちの生活と政治 3 世界の中の日本 (2) 国際社会の権利と義務の役割		公民的分野